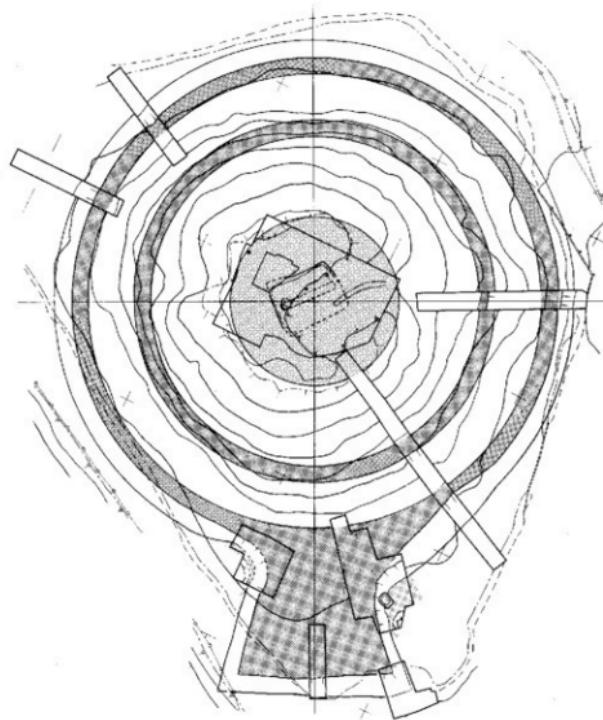


# 舞松原古墳



1997

福岡市教育委員会

# 舞松原古墳



1997

福岡市教育委員会



## 序

舞松原古墳は、福岡市東区の香椎平野の北方丘陵上に位置しています。この周辺は、仲哀天皇・神功皇后を祭神とする香椎宮が鎮座することに代表されるように、古代より豊かな歴史を誇る地域であります。またより古くは、福岡市東部から船原平野にかけては、前期古墳が多いことでも注目される地域であります。その一つである舞松原古墳についても平成7年に、国庫の補助を受けて重要確認調査を実施し、古墳の時期や規模、形状を調査いたしました。その結果、「帆立貝式」とも呼ばれる円墳に方形の張り出し部（造出部）を付設した、全長37mの古墳であり、時期は4世紀末で、こうした形状の古墳としては全国的に最も古いもの一つになることが明らかになりました。おりしもこの時代は、朝鮮半島との交渉が盛んになる時期ともされ、この地域の香椎宮の伝承とも合わせて、また古墳の形状から考えられる当時の中央である畿内との関係性など、極めて興味深い発見になりました。本書は、この舞松原古墳の調査成果を報告するものです。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で広く活用されるとともに、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。また調査後、現地にはその成果を記した説明版が設置されています。市民の散策や歴史を学ぶ場として利用されることを願ってやみません。最後に、発掘調査にあたりまして御協力頂いた多くの方々に対し、心から謝意を表します。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

## 例　　言

1. 本書は、国庫補助を受け、福岡市教育委員会が、平成7年度重要遺跡確認調査として実施した、福岡市東区舞松原の緑地保全地区に所在する舞松原古墳第1次調査の報告書である。
2. 本書の編集・執筆は、久住猛雄が行なった。
3. 本書に使用した遺構実測図は久住・北村幸子・西山めぐみ・野口未幾・境靖紀・久保山勝広・永井大志・井上義也・坂本憲昭が、遺物実測図は久住が作成した。製図には、成清直子・久住・北村があたった。また、本書に使用した遺構・遺物写真は久住が撮影した。
4. 本書の図中の標高は、東区舞松原小学校の国土地理院水準点より移動したものである。
5. 本書に使用した方位は、特に断りのない場合は磁北である。真北との偏差は西偏06° 21'である。
6. Fig. 1には、国土地理院発行の2万5千分の1地形図『古賀』『福岡』を使用した。また、Fig. 2は都市計画図をもとに作成した。
7. 本古墳は「松崎古墳」という名称もあったが、現在の地名を探って「舞松原古墳」という名称に統一している。
8. 本調査に関わる遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定である。広く活用されたい。

遺跡調査番号	9531	遺跡略号	MMK-1	分布地図番号	松崎18
調査地	福岡市東区舞松原（緑地保全地区）		調査面積	110 m <sup>2</sup>	
調査期間	1995年10月16日～同年12月20日				

## 本文目次

I	はじめに.....	1
1	調査に至る経緯.....	1
2	調査の組織.....	1
3	調査の経過.....	1
4	古墳の位置と地理的歴史的環境.....	2
II	調査の記録.....	5
1	調査の概要.....	5
2	墳丘の調査.....	5
(1)	第 1 レンチ.....	6
(2)	第 2 レンチ.....	8
(3)	第 3 レンチ.....	9
(4)	第 4 レンチ.....	9
(5)	第 5 レンチ.....	10
(6)	第 6 レンチ.....	11
(7)	第 7 レンチ.....	12
(8)	第 8 レンチ.....	12
3	墳頂部の調査.....	13
(1)	墳頂部の概要.....	13
(2)	主体部（埋葬施設）の調査.....	14
(3)	出土遺物.....	16
4	歴史時代の構造と遺物.....	19
(1)	第 5 レンチ土壙墓と出土遺物.....	19
(2)	墳丘各所の出土遺物.....	22
	・表 1 遺物観察表.....	22
III	まとめ.....	23

## 挿図目次

Fig. 1.	周辺遺跡分布地図(1/50,000) .....	3
Fig. 2.	舞松原古墳位置図(1/7,500) .....	4
Fig. 3.	舞松原古墳現況地形測量図(1/400) .....	5
Fig. 4.	舞松原古墳調査区設定図(1/300) .....	6
Fig. 5.	第 1・2 レンチ平面図(1/100) .....	7
Fig. 6.	第 1 レンチ南壁土層図(1/60) .....	8
Fig. 7.	第 2 レンチ南壁土層図(1/60) .....	9
Fig. 8.	第 3・4 レンチ平面図(1/100) .....	10
Fig. 9.	第 3・4 レンチ土層図(1/60) .....	10
Fig. 10.	第 5・6・7・8 レンチ（造出部） 平面図(1/100).....	11
Fig. 11.	第 5・6・7・8 レンチ土層図 (1/60) .....	12
Fig. 12.	墳頂部調査区平面図(1/60) .....	13
Fig. 13.	壺形土器(P-1)出土状況図 (1/15) .....	14
Fig. 14.	(1)主体部墓壙平面図(1/40)、(2)主体部 遺物出土状況図(1/10)、(3)主体部縦断 方向土層図(1/20) .....	15
Fig. 15.	主体部横断方向土層図(1/30) .....	16
Fig. 16.	墳頂部出土壺形土器(1/6、1/3) .....	17
Fig. 17.	主体部出土鉄器実測図(1/2) .....	18
Fig. 18.	第 5 レンチ土壙墓出土遺物実測図 (1/3、1/1) .....	20
Fig. 19.	第 5 レンチ土壙墓平面図・断面図・上 層図(1/20) .....	20

- Fig.20. 第5トレンチ土壤墓出土瑞花双鳳八稜鏡  
(2/3) ..... 21  
Fig.21. 墳丘各所出土遺物(1/4, 3/4) ..... 22

- Fig.22. 墳丘復元平面図(1/400) ..... 23  
Fig.23. 墳丘復元断面図(1/400) ..... 23

## 図版目次

- PL. 1
  - 1. 南西（松崎縁地付近）から舞松原丘陵を望む  
(↓は古墳の位置)
  - 2. 北東（城ノ越城山頂）から舞松原丘陵を望む
- PL. 2
  - 3. 調査前の墳丘の状況（東から）
  - 4. 調査開始直後の墳丘北西部（造出付設部）の  
状況（北西から）
  - 5. 調査前の墳丘南西部の状況（第1トレンチ掘  
削前）（南西から）
  - 6. 第1トレンチ掘削状況（および南壁土層下半  
の状況）（左下から）
  - 7. 第1トレンチ上部南壁土層（盛土）の状況
- PL. 3
  - 8. 第1トレンチ中部南壁土層の状況
  - 9. 第2トレンチ掘削状況（下から）
  - 10. 第2トレンチ掘削状況近景（下から）
  - 11. 第2トレンチ上部南壁土層（盛土）の状況
- PL. 4
  - 12. 第3トレンチ掘削状況（東から）
  - 13. 第4トレンチ掘削状況（南東から）
  - 14. 第5トレンチ（くびれ部）掘削状況  
(北西から)
  - 15. 第5トレンチ南壁上層状況（右が天）
  - 16. 第5トレンチ北壁土層状況（下が天）
- PL. 5
  - 17. 第6トレンチ掘削状況（北西から）
- PL. 6
  - 18. 第7トレンチ掘削状況・東壁土層状況（墳端  
付近）
  - 19. 第8トレンチ掘削状況（後方は第5トレンチ、  
北西から）
- PL. 7
  - 20. 第5・6・7・8トレンチ造出部確認状況  
(墳頂から)
  - 21. 主体部鉄器出土状況近景（上から）
  - 22. 主体部鉄斧確認状況（南から）
  - 23. 主体部鉄器出土状況（南から）
- PL. 8
  - 24. 主体部出土鉄器
  - 25. 主体部全景（墓壇は未掘削、西から）
  - 26. 主体部全景（上に同じ、南から）
  - 27. 主体部墓壇全景（墓壇の一部をトレンチ掘削、  
西から）
  - 28. 主体部横断截割状況（南から、後方は埋め戻  
し途中）
- PL. 9
  - 29. 墳頂部二重口縁壺出土状況（上面、北から）
  - 30. 二重口縁壺出土状況（下層、西から）
  - 31. 墳頂部出土二重口縁壺
  - 32. 墳頂部調査区東南部掘削状況
  - 33. 第5トレンチ土壤墓遺物出土状況（北から）
  - 34. 土壤墓出土瑞花双鳳八稜鏡
- PL. 9
  - 35. 土壤墓出土越州窯青磁碗
  - 36. 土壤墓出土土師器壺・皿
  - 37. 調査後設置された説明板

# I はじめに

## 1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会では、市内の主要な古墳について、国庫補助による重要遺跡確認調査として継続的に調査を実施している。また舞松原古墳の所在する緑地保全地区（香椎ヶ丘緑地）について、公園の整備事業が福岡市の緑地推進課によって平成7年度に行われることに伴い、舞松原古墳の内容を記した説明板を設置することになり、古墳の内容把握のための発掘調査を福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課が実施することになった。

舞松原古墳は、既に周知の遺跡として分布地図にも記されているが（『福岡市文化財地図（東部Ⅰ）』1981年）、径30m前後の円墳とするだけで、測量図も無く、詳しい内容が不明であった。墳頂部から南西に開く大きな陥没部分を、横穴式石室が壟掘され、石材などが抜き取られた痕跡を見て、後期古墳とする推測が一部になされていた。しかし調査前の踏査では、独立丘陵の最高所の単独の築造であり、墳頂平坦面が比較的広いこと、石材の散乱が全く見られないことから、前期古墳である可能性も予想された。調査は、詳細な現況測量図の作成と古墳の規模・形状・時期・主体部の形式などを確認する必要最小限のものとし、数本のトレンチを設定・掘削する予定にして、平成7年10月16日より開始された。

## 2 調査の組織（当時）

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

第2係長 山口謙治

調査庶務 内野保基

調査担当 埋蔵文化財課第2係 久住猛雄

調査参加者 井上義也（別府大学生）、北村幸子、西山めぐみ（九州大学聽講生）、喜田 敏、崎村春子、土倉崇子、橋本幸樹、山下弘訓（九州大学学生）、井上祐一郎、今垣屋毅行、久保山勝広、芝藤裕志、永井大志、平川朋和（福岡大学歴史研究部）、境 靖紀（福岡大学大学院）、野口未幾（早稲田大学学生）、梅木繁良、鹿毛賢次郎、黒瀬千鶴、桜井慶子、高野瑛子、武田潤子、谷 英二、徳永栄彦、村本義夫

なお、現況地形測量図と遺構図面の作成は、久住を中心にして上記の学生諸君があたったほか、坂本憲昭の御協力を得た。また調査中、福岡市教育委員会の荒牧宏行・大塚紀宣・下村 智・長家 伸・山口謙治・山崎純男・吉留秀敏の来訪と調査指導を受けたほか、現場での鉄器の取り上げ及び銅鏡を含めた金属器の鋸落しと保存処理は比佐陽一郎・本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）の手を煩わせた。さらに現地では武木純一（福岡大学助教授）、大野 薫（大阪府教育委員会）、石木秀啓（大野城市教育委員会）の視察と御教示を得た。大森 円（九州大学大学院）には現地見学の際に、図面作成に御助力頂いた。また整理作業では、八稜鏡については舟山良一（大野城市教育委員会）、境靖紀の、越州窯青磁碗を含む平安時代の遺物については、佐藤一郎（福岡市教育委員会）、田中克子・森本朝子の御教示を得た。また報告書作成にあたっては吉留秀敏の御教示を得た。以上の各氏に対しては記して謝意を表したい。さらに、テントのみの寒い山の上の中にもかかわらず、発掘に携わって頂いた作業員の皆様には、あらためて感謝の意を申し上げたい。

## 3 調査の経過

調査は平成7年10月16日からの踏査と準備から始まった。10月18日に麓の公園入口に設置したユニットハウスへの機材搬入を行ない、19日より測量基準杭の設定とレベルの移動、および墳丘の草刈り・枝切りを始め、10月25日より墳丘と周辺地形の測量を開始した。11月2日に作業員を増やし、墳丘全体の清掃と灌木切りを行ない、墳丘の現況写真を撮影した。なお発掘にあたっては、緑地の中のため、樹木

は必要最小限の灌木しか伐採できないということで、一部トレンチの設定や調査確認に制約を受けることになった。一方、クスノキをはじめとする樹木は古墳の上を覆い、雨天時でもある程度掘削作業については続行することができた。測量図作成の残りと並行して、11月3日には第1・2トレンチを、4日には東の尾根方向に第3トレンチを設定、掘削を開始した。なお11月3日には、墳頂部において二重口縁壇が墳丘表面に露出しているのを発見し、急遽この出土状況を調査した。この時点で、舞松原古墳が前期古墳であることが確定的となった。11月6日、第1・2トレンチで平安時代の土器器片が出土し、墳丘が古代に再利用されていることが推定された。11月15日から、主体部の形式を確認するために墳頂部調査区を設定し、陥没部（搅乱）の掘削・清掃を開始した。同日、第2トレンチの反対側に第4トレンチを設定、掘削を開始した。11月18日、墳頂部の搅乱を清掃中、不時に鉄器を確認し、急遽精査し木棺直葬主体部の存在を確認した。ここまで円墳とした場合の規模がほぼ判明したが、北西尾根方向については不明であるので、11月20日に第5トレンチを設定し、掘削したが墳端が現れずさらにこれを拡張し、翌21日にはくびれ部を検出し、前方後円墳になる可能性が高まった。さらに、完形の越州窯青磁碗を副葬する平安時代の土器墓を検出するおまけまでついた。（22日には八俊鏡を検出）。

前方後円墳の可能性が出たためと、墳頂部では主体部の墓壙の確認と精査、搅乱の完掘に手間取ったため、また図面作成に時間がかかってしまうために、調査は当初の予定を越えて12月にも続行した。12月1日、堀藏文化財センターの比佐篤一郎の手により主体部の鉄器を取り上げた。同日には反対のくびれ部を確認するために第6トレンチを、5日には墳端と前方部側縁の確認のために第7・8トレンチを設定した。これらのトレンチの調査の結果、前方後円墳ではなく、造出付円墳（帆立貝式古墳）と判明した。12月6日より、残る写真撮影や図面の作成と並行し、トレンチの一部を埋め戻し始めた。埋め戻しは、掘削排土の大半を土嚢袋に詰めていたために、効率的かつ、現状復旧の上でも効果的に行うことができた。墳頂部は、ある程度作業が終わった段階で、12月11日より埋め戻しを始め、掘削は最終的に主体部の裁断を行い終了した。12月19日にはテントとユニットハウスを撤去し、機材の大半も搬出し、翌20日に埋め戻しも完全に終了・調査前の現状に復旧し、調査は終了した。

なお整理作業は、平成8年度に行い、報告書を作成した。

#### 4 古墳の位置と地理的歴史的環境

舞松原古墳は、福岡市東部の多々良川北岸の、八田から香椎の海岸際に及ぶ古第三紀層の低起伏丘陵（柏屋丘陵の一部）のはば中央の山塊の頂上に位置する（Fig.1・2, PL.1-1・2）。周囲は、戦後の大規模な宅地造成によって丘陵の原地形や遺跡がかなり失われているが、古墳は幸いにも緑地保全地区の中にあったために破壊を受けず現在に至った。

この周囲は、古墳の北方650mに香椎宮が鎮座するように古代より歴史的環境の豊かな地域である（Fig.1）。舞松原古墳の前史としては、南東3.7kmに、绳文時代晩期末（弥生時代早期）の江辻遺跡（柏屋町）が夜臼式期の農耕集落として知られ、この地域が早くから開拓していたことが分かる。弥生時代の遺跡には、東南東3.2kmの蒲田部木原遺跡をはじめとする、蒲田水ヶ元遺跡等の蒲田遺跡群があり、中期の環濠や後期の方形環濠をもつ中期～終末期・古墳時代の集落、中期の甕棺が検出され、拠点集落の可能性がある。舞松原古墳の比較的近くでも、すぐ南に多々良大牟田遺跡群があり、東1.7kmには土井遺跡があり、前者からは有銅銅鏡と広形銅戈の、後者からは中細銅戈と中広銅劍の鋳型が発見されている。いずれも青銅器生産を行う拠点的な集落と予想されるが、造成によりほとんど破壊されており（鋳型は工事中発見らしい）、実態は不明なのが惜しいところである。南方2.5kmには戸原鹿田遺跡（柏屋町）があり、弥生時代中期初頭から古墳時代前期の大溝や水利施設が発見され、大量の弥生土器や木器が出土し、やや上流の低台地上に大規模な集落の存在が予想され、古墳初頭の銅鏡の出土等からも、柏屋平野の中心的な集落になる可能性が高い。これに接して多々良込田遺跡があり、弥生終末から古墳前期の一大拠点となる。柏屋郡域では弥生終末から古墳初頭の外米系土器の受容がやや遅れる傾向にあるが、多々



Fig. 1. 周辺遺跡分布地図(1/50,000)

良込田遺跡は伝統的V様式や庄内式を含む畿内系土器をはじめ（ただし庄内甕等福岡平野産含む）、山陰系、瀬戸内系、東海系、韓式系などの外米系土器が多く、搬入品も少なくない。直線的な溝で集落内が区画され、近年の調査では弥生終末の道路の可能性のある2本の溝が検出されている。一方、同時期の海岸部では、北方約4kmに唐原遺跡があり、弥生後期から古墳中期初頭までの砂丘上に営まれた漁撈関係遺物の多い大集落であり、外来系土器も多く、韓式系土器も出土している。柏原平野で注目すべきは、弥生終末の首長墓が判明していることであり、蒲田遺跡群に接した上大隈平塚遺跡（柏原町）はその代表で、大形箱式石棺を主体とする墳丘墓である。この西方2kmの名子塚2号墳も同様の墳丘墓である。さらに舞松原古墳の南方5.1kmの亀山古墳も人形箱式石棺で、内面に朱が塗られ、墳丘は円形ともされるが、一辺約20mの方形の弥生墳丘墓の可能性も指摘されている。これらの廟葬品は盗掘を受け不明な点が多いが、平塚では完形に復元される蠍螺座連弧文鏡と軟玉の管玉17点、亀山では碧玉の管玉4



Fig. 2. 舞松原古墳位置図(1/7,500)

墳は名島1号墳であり、多々良川河口を見下ろす位置にある。全長約30mの前方後円墳で、推定粘土被より三角縁吾作鏡九神三獸鏡を出土し、二重口縁壺より布留I式併行である。これに接して名島2号墳があり、後続する時期か。天神森古墳は墳丘を道路で切断されているが、50m前後の前方後円墳の可能性があり、三角縁天王日月獸文帶三神三獸鏡と小形の盤龍鏡が発見され、前期中頃か。柏屋平野全体を眺望する位置にある。蒲田遺跡群に接し、部木八幡古墳群があり、主墳の1号墳は全長約20mの前方後方墳である。平野の中央には戸原王塚古墳がある。全長約45mの前方後円墳で詳細は不明だが立地などから中期初頭か。これを境に柏屋平野中央では前方後円墳の建造がとどまる。一方海岸部では、舞松原古墳の北西3km強の丘陵上に香住ヶ丘古墳があり、径25m程度の円墳で三角縁天王日月獸文帶二神二獸鏡が工事中に発見されている。JR香椎駅の周辺には、古塚や耳塚と呼ばれる古墳があったが、詳細は不明である。天神森古墳や戸原王塚古墳の平野部的一群と、香住ヶ丘古墳や舞松原古墳などの海岸部の一群は別の首長墓系列であろう。名島古墳は両者の起点となる性格かもしれない。後期古墳では、海岸では唐原遺跡で砂丘上に古墳群が築かれ、柏屋平野では、インターチェンジ建設で消滅したかけ塚2号墳や鷺田山古墳（柏屋町）などが円墳だが規模や内容から首長墓の可能性がある。この時期の集落には、蒲田部木原遺跡や古大間地遺跡（柏屋町）などの玉造遺跡が点々とあるのが注目される。

古代では多々良込田遺跡の官衙的遺構があり、香椎平野では奈良時代初めには香椎宮の創建を見る。

点があり、墳丘を持たない酒殿宮跡遺跡（須恵町）の箱式石棺でも後漢末の獸首鏡と小形仿製鏡II b型、小形の管玉が出土しているので、他も本来は鏡を含む豊富な副葬品があったと推定できる。これら弥生終末の墳丘墓と次代の前期古墳への連続性や、多々良込田遺跡の存在は、この地域が「奴國」の東の「不弥國」である可能性を示唆する。

地域最古の古

## II 調査の記録

### 1 調査の概要

舞松原古墳の調査は基礎資料としての測量図の作成から開始した。測量図の座標は、任意に設定したが、光波測量機を用いて座標杭および古墳の周囲に閉合トランバースになるように杭を設置し、平板と光波測量機を併用して1/100で測量を行った。(Fig. 3)。高さは国土地理院の標高を移動して使用している。発掘調査は、古墳の規模・形状・時期・主体部の形式を確認するための必要最小限のトレンチ調査とし、墳丘については測量の成果を見ながら、墳丘の残りの良いところ、尾根方向、後世に盛土された部分などを選んでトレンチを設定した。墳頂部については、まず後世の擾乱による陥没部の精査をする目的で調査区を設定し、適宜これを拡張した(Fig. 4)。掘削は、重機等の機械が山上のため持ち込めないので、全て人力で行った。掘削排土については、埋め戻しを考慮し、その大半を土嚢袋に納めて処理した。古墳は、緑地の中にあるために樹木は灌木以外伐採できず、公園でもあるため、歩道やベンチ等の施設を保全しなければならないので、結果的にトレンチの設定に制約があり、調査確認に不十分な部分を残すことになった。以下、墳丘トレンチ、墳頂部の順で調査の記録を述べていく。なお歴史時代の遺構と遺物については最後にまとめて記すこととする。

### 2 墳丘の調査

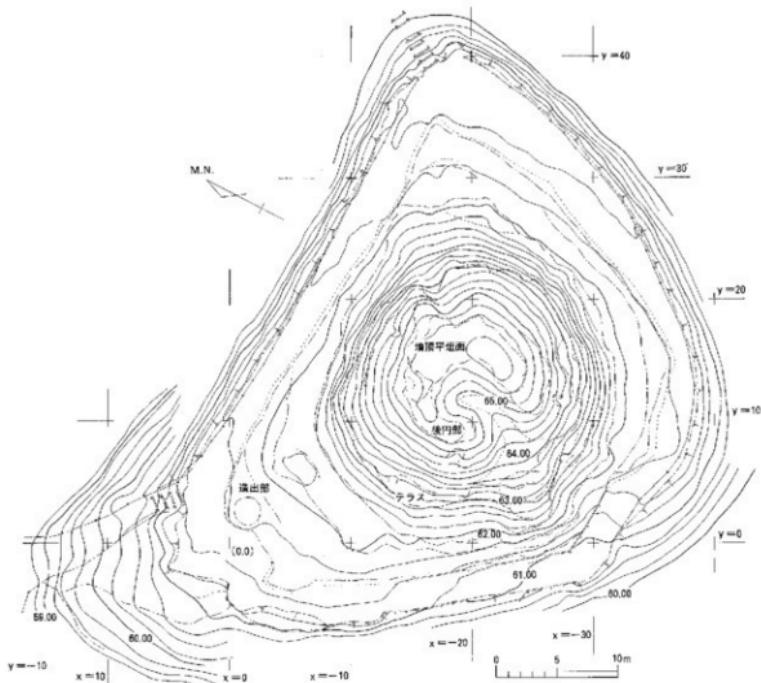


Fig. 3. 舞松原古墳現況地形測量図(1/400)

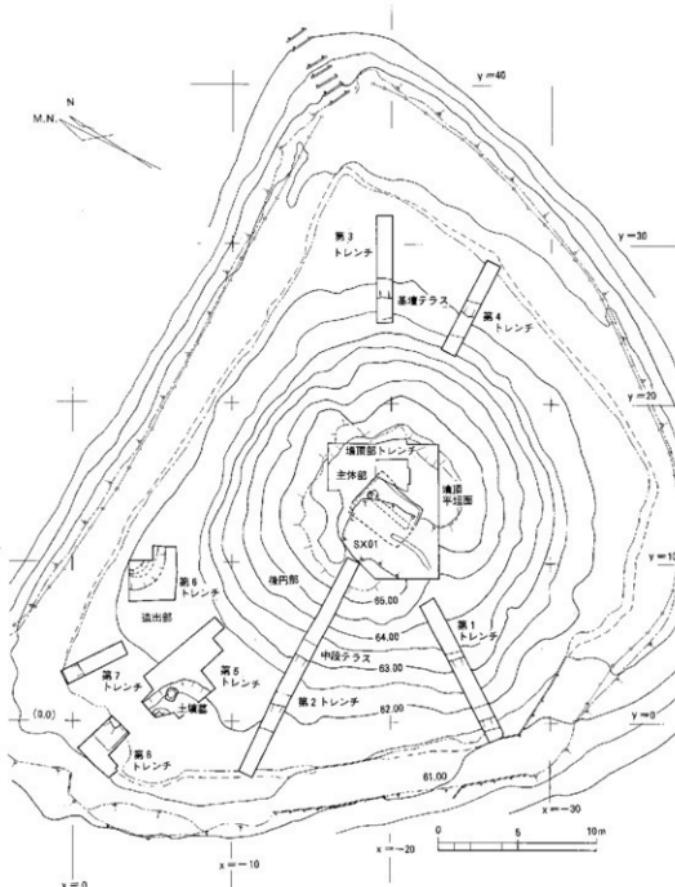


Fig. 4. 舞松原古墳調査区設定図(1/300)

墳丘の現状は、径30m弱の円墳に見える(PL. 2-3・4)。墳丘の残りは悪くはないものの、墳頂部は南西に向かって開くよう陥没し、また頂部も削平を受けているようである。測量の結果、墳丘の北側は大きく削られ、南側も等高線から多少削られているとみられる。南西部はおそらく墳頂を削った際の排土が盛土されたようで、やや突出している。西側と東側はこれらに比べれば、比較的の残りが良いと予想される。

墳丘トレンチの調査は、まず表土を除去し、さらに流土ないしは客土を除去した上で墳丘遺存面を出することを心がけた。トレンチ下方については地山まで下げた。しかし、盛土と流土の境界が当初区別困難だったことから、一部墳丘面を掘りすぎたり、また地山の見極めも難しく、掘りすぎた場合が多い。このため平面図は土層断面を検討しながら補正を加えている場合がある。地山は、古第三紀層の風化した頁岩や粘板岩等の岩盤が多いが、珪化化石状の部分や、砂が固まったような柔らかくもろい凝灰岩質の部分もあり、さらにやや粘土化した未結の風化シルトが表層として存在し、これらが狭い範囲で脈によって変わるので、調査時には頭を悩ました。盛土もこれらを掘削したものを突き固めて盛り上げているわけで、土層を詳細に検討してこの区別が初めて分かった箇所もある。このように、試行錯誤の調査であったが、以下各トレンチの調査の概要を記す。

(1)第1トレンチ (Fig. 5, 6, PL. 2-6・7, 3-8)

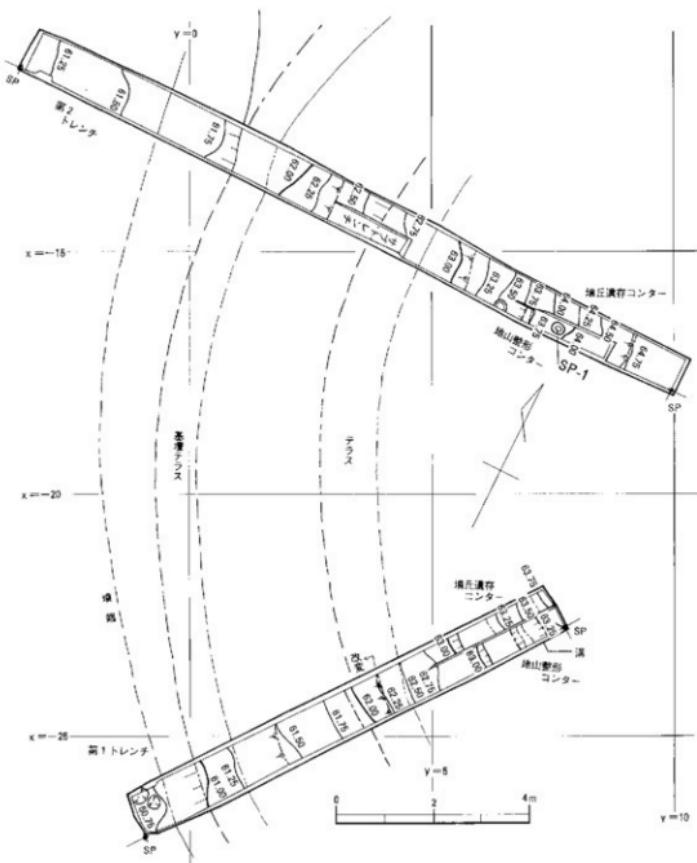


Fig. 5. 第1・2トレンチ平面図(1/100)

第1トレンチは、当初墳頂から南西に開いて陥没する部分が石室と思われていたために設定したが、墳頂部の二重口縁壇の発見でこの当初の目的は失ったものの、結果的に墳丘南西部の後世の客土によると思われる突出部分の性格と時期、その客土のために墳丘の下方が残りが良いと予想されるため、その状況を明らかにするために調査を行った。最初に設定・掘削したトレンチのために、地山の状況がつかめず掘りすぎてしまったが、土層の検討の結果、トレンチの西端から約65cmの所に墳端と思われる地山表層の変換点があり、さらに西端から約1.5mでテラス状になることが判明した。墳丘斜面中央テラスは次の第2トレンチのように明確でないが、西端より約6m程度の部分で、その痕跡が見いだされた。このテラスは本来外側にさらにのびるはずだが、暗褐色の16~21の土層群が切り込んでおり、この層中の下方から平安時代の土師器片が多く出土しているので、この時期にこの部分で墳丘の改変・再利用が行われたのであろう。第5トレンチではこの時期の土壤墓が検出されているが、第1トレンチのこの部分でも、鉄釘片が出土しているので、あるいは土壤墓などを調査ミスで除去してしまっているかもしれない。盛土はこのテラスのやや上から施され、土層の観察では、大きく2工程に別れる可能性が高い。トレンチ上方は南半分をサブトレンチとして地山まで下げた。この際、溝状の遺構が検出された。ただ

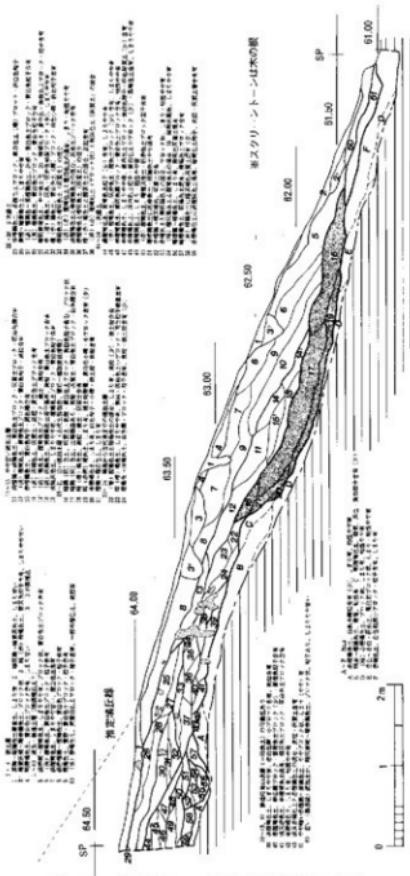


Fig. 6. 第1トレンチ南壁土層図(1/60)

は流土ないし客土と考えるに至った。一方、墳頂部の等高線の状況からは(Fig. 3)、本トレンチのこの箇所は削平されていると考えられ、一度削られた後に、その時期の遺物を含む土がかぶさった(客土?)としか考えられない(17~21層)。一方墳端は、トレンチの西端から3m強にあるが、土層を観察すると、非常に浅い溝状の落ち込みになっていることが分かる(28層の下)。盛土はテラスと推定される部分(地山E層の上面がこれにあたる)のやや上から施されるが、大別2工程、上述の82~93の層群が二期となるなら3工程に分かれると推定される。テラスは、当初の予想通り現状の墳丘面にその位置がここでは反映されている。また、トレンチ西端から約4.8~5.6mの付近が基壇テラスになることが観察された。なお、本トレンチでの墳端およびテラスの標高は各々61.62m、62.88mを測る。一方、第1トレンチでは各々61.10m(1トレ61層を旧表土とした場合)、62.71mとなって第2トレンチとはレベルが異なるが、平面的にはよく対応する位置に両者が来ることと、丘陵上の地山整形の前期古墳の墳端は往往にしてこのような場合が多いことから問題ないと考える。現状でも残る旧地形は第1トレンチの方向に

しこれは第2トレンチでは対応する場所に検出されず、また埋め戻されたような上層を呈する(52~56層)。築造過程の何かに関連するのだろうが、実態は不明である。なお盛土下の地山表層(旧表土)と思われる土層が検出されているが(39~43層、58・59も可能性あり)、灰が混じったような土質(注記では灰質土)であることが注意される。

#### (2) 第2トレンチ (Fig. 5, 7, PL. 3-9~11)

測量の成果と現墳丘表面の観察で、残りが良好と思われた部分にトレンチを設定した。掘削は第1トレンチと同様、地山が当初よく把握できなかったため、トレンチ下方とテラスの部分において掘りすぎてしまった(中央南半分サブトレンチ、もろい凝灰岩状の地山)。また逆にトレンチ上方南半分のサブトレンチでは、82~93の層群が、やや暗く灰質土を含むため、築造前の旧表土と調査終盤まで把握して掘削をこの下面で止めていたが、この下に真の旧表土層があることが判明し(105層)、これらが築造のある段階であることが分かった。ただしそれは、築造の休止期間で表土化したのか、当時の表土を含む盛土なのかここだけでは判断つかない。なおこのサブトレンチでは、地山を切り込んで径30cmほどの深いピットが検出されている(S P-01)。位置的に第1トレンチの溝と対応するか。

トレンチ上方は、表土を除去した段階で、ただちに墳丘盛土となるのではと調査当初は考えたが、平安時代の土器片を出土するため、これ

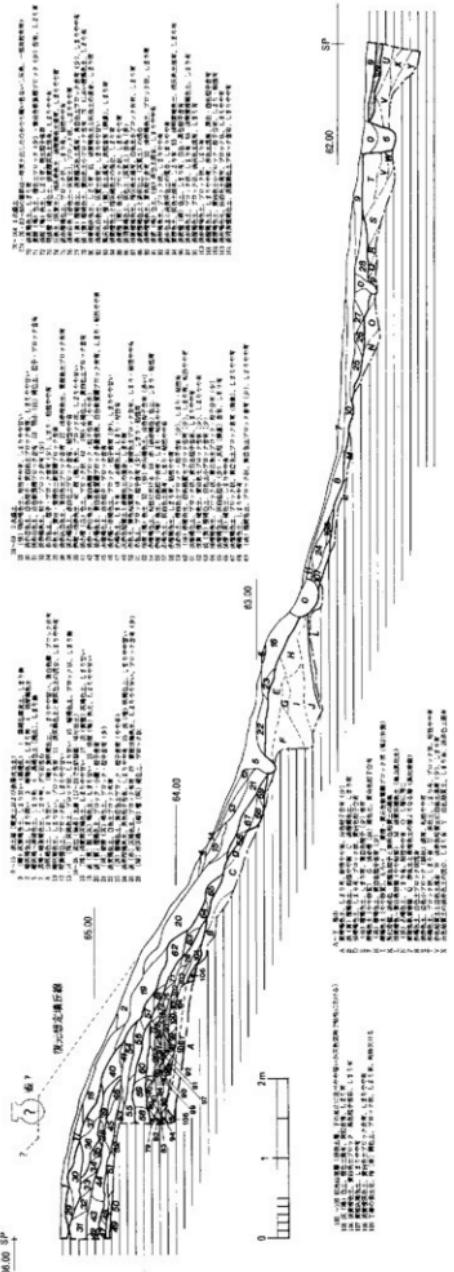


Fig. 7. 第2トレンチ南壁土層図(1/60)

低く、その地形が反映したのであろう。つまり平面形を重視して墳端のレベルまではそろえなかつたのだろう。むしろ人為的な整形がより反映する墳丘中段のテラスのレベルはより近づいていることを重視したい。

(3)第3トレンチ (Fig. 8., 9., PL. 4 – 12)

墳丘から東にのびる尾根方向に設定したトレンチである。地山整形の旧墳丘面は比較的浅く検出された。地山の岩盤表面を這う木の根の搅乱のためにやや不確実な部分もあるが、墳端はトレンチ東端より約4m強に、基壇のテラスは同じく5.4~6.5mの位置に検出された。ただし、基壇テラスの東端は流出しているので正確ではない。それぞれのレベルは61.90m、62.40mを測る。なお、トレンチの東側では溝状構造が検出されたが(SD01)、遺物の出土もなく、時期は不明である。しかし、第4トレンチ東端の落ち込みに統くようであり、方向から古墳に伴うものではないだろう。この上層の13~19の層群は表土に近く、あるいはごく最近の溝かもしれない。

(4)第4トレンチ (Fig. 8., 9., PL. 4 – 13)

このトレンチは、墳丘の假中心杭(X=-19, Y=13)をはさんで第2トレンチの反対側に設定したもので、墳丘径を求める目的で設定した。地山整形の旧墳丘は、比較的深い掘削で検出された。ただし本トレンチの成果は、木の根の搅乱の多さと、全体的に削平気味のために、やや不正確さは残る。墳端はトレンチ東端から約3mの所と認識したが、(A)、土層の検討と第3トレンチの位置関係からは、あるいはこれよりやや外側かもしれない(B)。ただしトレンチの中での平面的な検出状況では前者が妥当で、土層も搅乱が多いので何とも言えない。Aの場合レベルは61.73m、Bの場合約61.1mであり、第3トレンチとの比較では前者が妥当か。基壇テラスは大きく削平・流出しているが、これを反映する緩斜面が

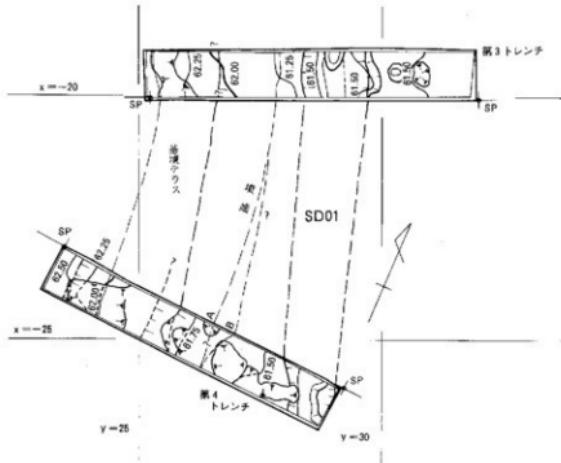


Fig. 8. 第3・4トレンチ平面図(1/100)

なお、本トレンチの墳端と第2トレンチの墳端の距離を計測することによって、地山整形の下端での墳丘の径はほぼ30m(29.7m)という調査結果が得られた。なお、基壇テラス外端間では27.3m程度になる。

#### (5) 第5トレンチ (Fig. 10, 11, PL. 4-14~16)

このトレンチは、墳丘から北西に延びる尾根方向に設定し、前方部等が付設するのか、円墳として終

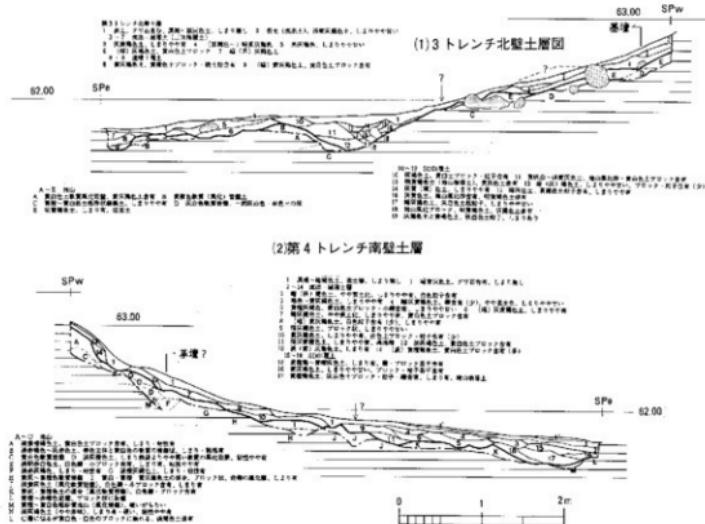


Fig. 9. 第3・4トレンチ土層図(1/60)

トレンチ東端から3.7~5.3mの間にある。ただし実際の基壇テラスの東端はこれより西になるだろう。レベルはその西端から、62.25m前後となる。墳端・基壇テラスとともに、第3トレンチよりやや低くなっているが、これは第3トレンチが尾根方向にあるためであろう。また、第4トレンチの東端では溝状の落ち込みがあり、覆土の状況・方向から第3トレンチ東側の溝(SD01)の延長と推定され、古墳自身には無関係のようである。

わるのかを確認する目的で調査したものである。初めは幅1m、長さ6mのトレンチであったが、予想していた墳端への落ちが見いだされなかつたため、少しずつ南西に拡張し、最終的にこのトレンチの形となつた。結果的に、くびれ部と言える墳端の屈曲を検出した。なおこの際に、くびれ部への再堆積の土を切る形の平安時代の土壙墓を検出したが、これについては後述する。平面的な掘削状況と土層の観察から、これがくびれ部であることは間違いないであろう。等高線も造出部（後述）の先端方向へ屈曲する。なお、このトレンチはすべて地山整形の墳丘である。造出部の側縁は細い溝になっており、土層の観察から、後円部に続く部分は浅い溝状にならないが（Fig.11-(1)(2)）、第1トレンチの墳端は浅く溝状になるので、周溝とは言わぬまでも、墳丘周囲は浅く曖昧な溝が廻っていたのかもしれない。本トレンチでは、本来の墳丘面が若干削平を受けていると判断され、したがつて基壇テラスの落ちの上端は削平されていると思われ、本来は平面図のラインより内側（第2トレンチの位置からすると約1.5m前後か）にその上端があったと推定できよう。後円部に続く部分での墳端は土層では（Fig.11-(1)）、平面的な検討よりも若干外になる可能性もある。墳端のレベルは、61.55m～61.45mである。

#### (6) 第6トレンチ (Fig.10, 11, PL. 5-17)

第5トレンチの成果を受けて、反対のくびれ部を捜す目的で設定した。トレンチの西に接して大きなクスノキがあり、この太い根による搅乱が多く、期待したくびれ部は明確には検出できなかつた。しかし、トレンチの各壁面の土層を詳細に検討した結果、円墳とした場合の墳端がトレンチ西断面には現れず、むしろ北側の断面に非常に浅い溝状の部分が確認され（Fig.11-(3)の4・5層の下）、これを地山

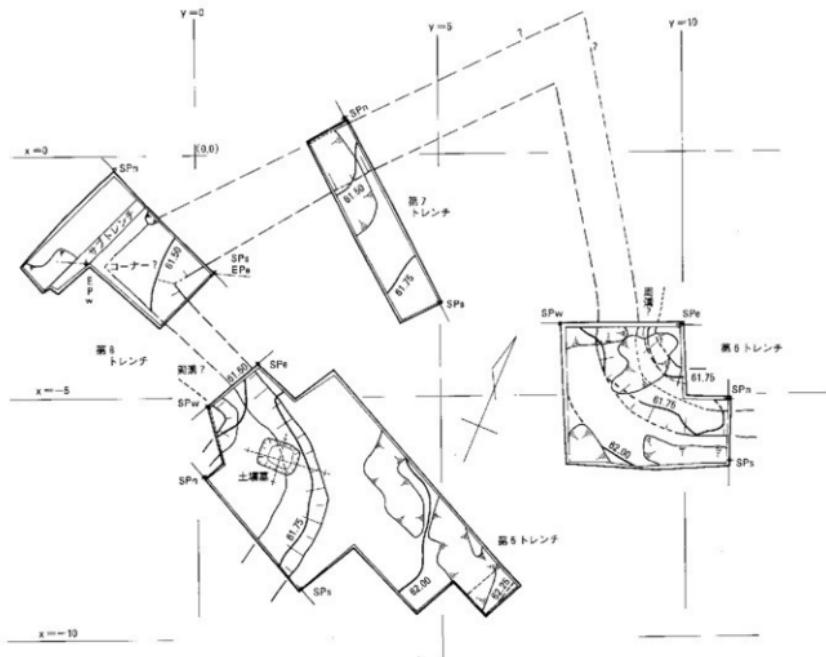


Fig.10. 第5・6・7・8トレンチ（造出部）平面図(1/100)

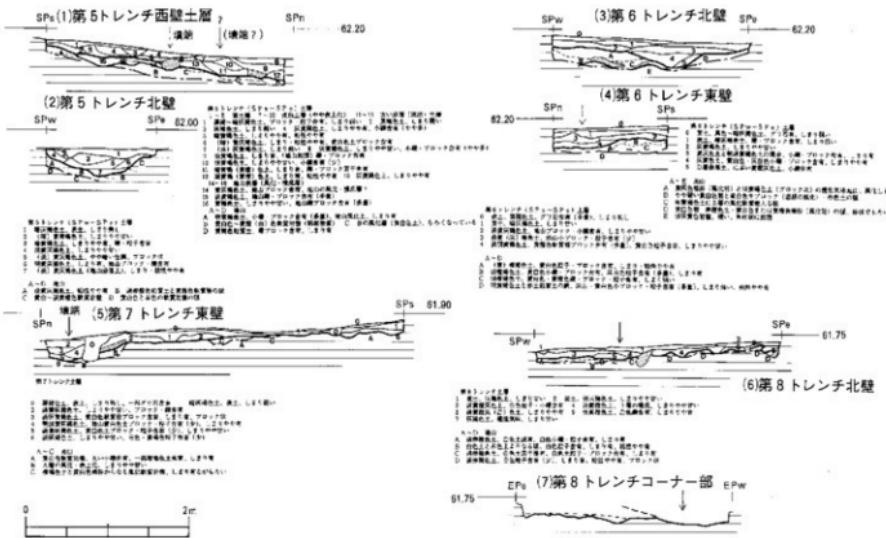


Fig.11. 第5・6・7・8トレンチ土層図(1/60)

整形の壇端と考えることができる。搅乱により削平気味のため、やや苦しいが、地山面の等高線はこのくびれ部に添うように曲線を呈する。L字状になっているトレンチ東壁の観察では、ごく浅い溝が廻るようである。これは、第5トレンチから第2トレンチの状況と同じである。この壇端のレベルは61.73m~61.85mを測る。また本トレンチの調査の結果、両くびれ部の下端間の幅は、約7.6mと推定できる。

#### (7)第7トレンチ (Fig.10, 11, PL. 5-18)

本トレンチは、推定主軸方向に、第5・6トレンチの結果北西尾根方向に延びる壇丘が、前方部ではなく「造出部」であった場合の壇端を検出する目的で設定された。結果としてトレンチ北約1/4から落ちはじめ、北西端ぎりぎりに壇端と見られる下端を検出した。トレンチのすぐ北側にベンチがあるためにこれ以上拡張できなかったので、やや曖昧ではあるが、さらにトレンチの西半分は大きく搅乱されているのでやや苦しいものの、東壁土層の観察から、この壇端はごく浅い溝になるように、外側へ地山整形面のわずかな立ち上がりが認められた (Fig.11-(5)参照)。おそらく壇丘前面には、外と画す細く深い溝が本来存在したと推定される。この壇端のレベルは61.30m、一方落ちの上端のレベルは約61.6mであるがこれは削平された結果と判断され、本来は造出部前端の上端のレベルは、62.1m前後と推定されるが (Fig.23)、その位置もトレンチの中央前後であろう。

#### (8)第8トレンチ (Fig.10, 11, PL. 5-19)

このトレンチは、前方部ないしは造出部側縁部を、及び造出部の場合はそのコーナー部分を確認するために設定した。はじめ、鉤形をしたトレンチの北西部部分 (1.0×2.8m) を掘削したが、削平が著しいこともあって地形の変換部分が全く見られないために、第5トレンチ側に拡張した。ここでも顕著な削平のため、明瞭な形では現れなかったが、かろうじて地山整形の痕跡を見いだすことができた。コーナー部分の壇端は曖昧だが、等高線の廻り方からと、土層および断面の検討から (Fig.11-(6)(7))、壇端がここで屈曲することが認められる。ただしトレンチ内での現状の上端と下端の差は20cm強程度しかない。このトレンチの調査結果はやや苦しい部分もあるが、観察された造出部前端のラインは、第7トレンチで確認された箇所と位置的にほぼ合致する。なおこの前端のレベルは61.44mを測る。

### 3 墳頂部の調査

#### (1) 墳頂部の概要 (Fig.12)

現状では墳頂部から西南方向に大きく陥没しており、調査以前は横穴式石室が荒らされた痕跡ともされていた。この陥没部の搅乱を精査して、主体部の形式を確認するために調査区を設定した。一方墳頂部東側に壺形土器が発見されたため (P-1)、周間に調査区を設定したが、土器列を求めて拡張したので、最終的に墳頂部は一つの調査区となり、墳頂平坦面の約2/3を調査した。ただし樹木はあまり伐採できないために一部掘削できず (Fig.12の斜線部)、また木の根のために一部不十分な掘削となった。

陥没部 (SX01) は、これを切り込む近年の搅乱である墳頂中心部の落ち込みや (P-3)、主体部発見の契機となったビット (P-5) もあるが、それ自体はより古い墳丘の改変 (再利用) である。これが主体部の半分以上を破壊している。墳丘盛土との区別がやや難しい (やや暗い色)、しまりのある覆土であり、近年の堆積とは思えない。完掘した底面は、道状に南西から北へ延びてくる。遺物は、現表土の下からその最下層まで散漫に土師器壺・皿の破片が出土するが、特別新しい遺物は無い。第1トレーニチの調査結果より、墳丘南西の新しい盛土は、古代の包含層の上にあるので、この原因となる墳頂部のSX01の形成はこれ以後であるが、その時期は特定できない。地元の人の話では、ここに旧陸軍の高射砲陣地があったとも言うが、基礎等ではなく、古そうな大きな樹木が墳丘上を覆う状況ではその話もそのままでは信じ難い。陸軍の測量杭が周囲にあるので、例えば陣地作りの演習でもしたのかもしれない。

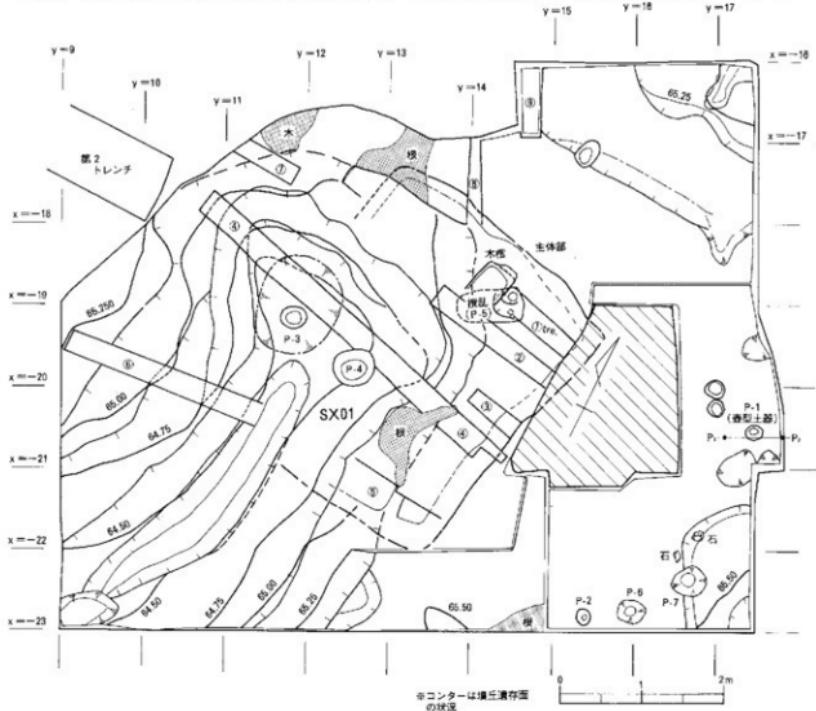


Fig.12. 墳頂部調査区平面図(1/60)

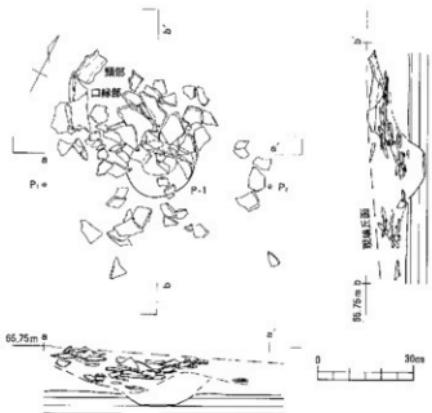


Fig.13. 壺形土器（P-1）出土状況図(1/15)

片は必ずしも底部付近ではないことが判明したので、厳密には原位置ではないと判断される。しかし出土状況を検討すると(Fig.13)、この下に浅いピット状の落ち込みがあり(P-1)、遺存率も半分未満だがかなりあり、胴部の上下は多少混乱あるが口縁・頭部は上面にあることから、原位置はこのピット(P-1)に樹立されていたが、後世ある時点で動かされ壊されたものの、元の位置からあまり離れず放置されたと解釈できる。この他には、古墳に伴う土器類は微細片が数点僅かに検出されたのみである。なおP-1の南の墳頂平坦面から墳丘斜面に落ちる傾斜変換線のやや内側に、長さ15cm程度の礫が二つ、表土を除去した墳丘面に検出された。周囲の地山にはない丸みを持つ石で、人為的に置かれたものであろう。古墳築造時のものならば、これらとP-1は墳丘の仮中心(X=-19, Y=13)から4.5m内外で、この円弧上にP-2の浅いピットも来るので、墳頂平坦面の縁には、礫を並べ、間隔をおいて壺形土器が置かれた可能性も考えられる。なおこの墳頂部東側はレベル的に最も残りが良い部分である(調査区中央東の未掘削部分が最も高く、現表面の最高所のレベルは65.90m)。これが墳頂平坦面の範囲を示すならば、直徑約9mの規模となる。また壺形土器がP-1に樹立されていたとすれば、これに流土がかぶっていることになり、その内側はやや高く壇状の部分があった可能性が高い。

#### (2)主体部(埋葬施設)の調査(Fig.14, PL. 6-21~23, 7-24~28)

主体部は、墳頂部の擾乱(P-5)を清掃中、その外に鉄器を引っかけたことで検出された。(PL.6-22)。これを若干広げ、それが鉄斧であることと木棺直葬になることを確認し、やや暗くしまりが甘い土が落ち込んだ木棺痕跡部分(Fig.15-(3)参照)を掘削して遺物の出土状況を確認するとともに、周囲を少しずつ掘り下げ墓壙の確認に努めた。なお調査期間等の関係で墓壙は全掘できなかった。主体部はSX01により大半を破壊されるが(PL.7-26)、確認・復元できた墓壙の規模は約3.9×3.3mとなる(PL.7-25・27)。墳丘盛土と墓壙埋土の区別は一部難解であり、若干下げてから確認した部分もあるが、土層の観察から、墓壙は少なくとも現在の墳丘表土直下から掘り込んでいる(Fig.15-(1)の土層や墓壙東側調査区壁の観察より)。したがって、現墳頂部が多少削平されていることと、南側と西側が失われているので断定は難しいが、掘込墓壙a類とされるものであろう(和田晴吉1989「葬制の変遷」「古代史復元」6)。第1・2トレーニングから考えられる2次盛土を切り込んでいることはそれと矛盾しない。

木棺痕跡は、その小口付近の長さ30cmの端部のみ残存していた(Fig.15-(3))。棺の幅は上端で約40cm、下端31cmを測る。横断面は逆台形に近く、底面は平面に近い。便板を設置した痕跡は無く、組合式木棺ではなく、広義の割竹形木棺(刳抜式の木棺)であろう。小口部も板を設置した痕跡が見いだせず、身は一体の刳抜であろう。割竹形木棺C類とされるものか(吉留秀敏1989「九州の割竹形木棺」

がこれは憶測である。比較的最近のことならば、古墳の副葬品等についての情報もありそうだがこれもなく、覆土の状況もあわない。SX01の成因は今のところ不明と言うほかない。

二重口縁部は、墳丘の現表面に露出している状況で発見された。上面では明確な掘り方ではなく、わずかに掘り下げて広げると、口縁部等の個体の上半がまとまって検出されたので(PL.8-29)、現場では原位置で崩壊したと判断した。これを上面として、その下面から出土した状況(PL.8-30)は、たまたま中心に破片が無く底部穿孔と考えたが、取り上げ後の整理で、底部穿孔ではないこと、底部付近の破片が上方にあったり、最も下の破

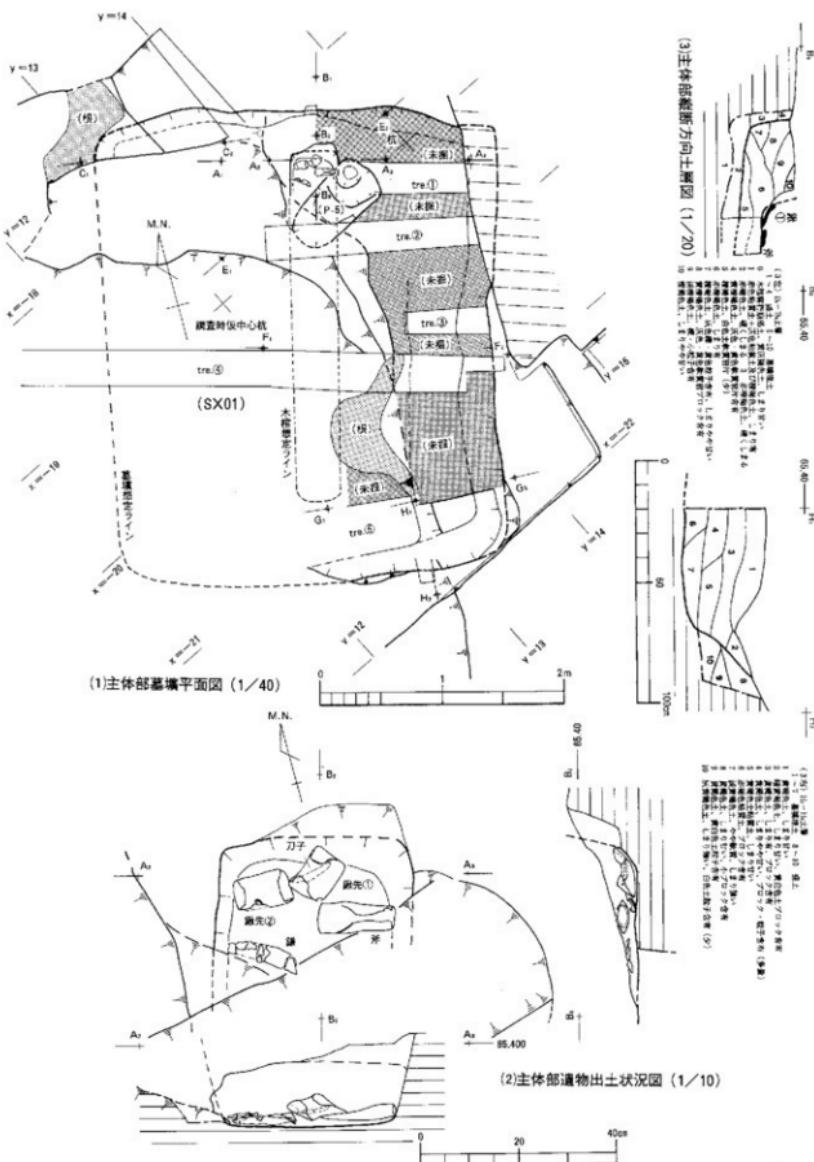


Fig.14. (1)主体部基壇平面図(1/40)、(2)主体部遺物出土状況図(1/10)、(3)主体部縦断方向土層図(1/20)

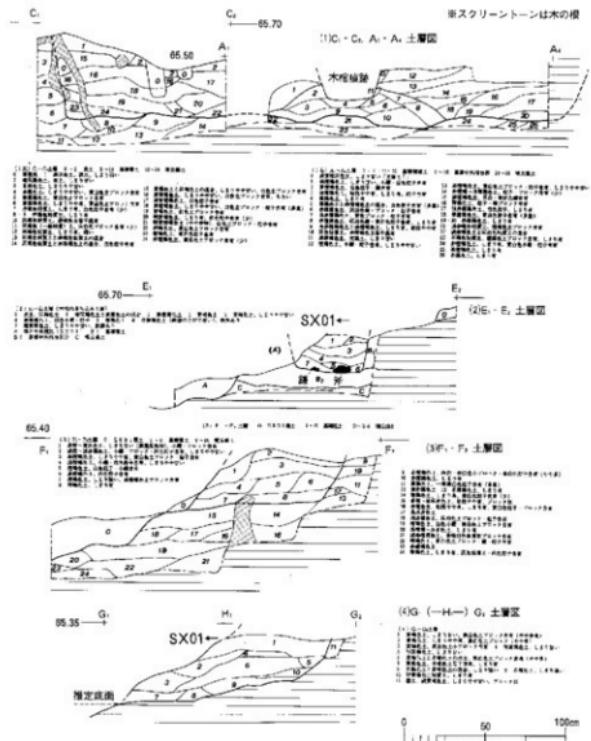


Fig.15. 主体部横断方向（西→東）土層図(1/30)

L<sub>6</sub>~21~23)、棺内小口部に鉄器が5点出土した。出土状況は、鉄斧と鍬先②はほぼ原位置で、鉄鎌も根による搅乱を受けているが原位置に近いであろう。刀子は鍬先①の裏に付着する状況であったが、本来は刀子が原位置に近く、鍬先①は小口部に立てかけていたものが落ち込んだか。出土状況と、鉄器自体の観察から、これらは柄柄状態からは外して斎葬されたものであろう。ただし鎌のみは柄柄の可能性もある。また棺内の上と周辺の搅乱の土はすべて細かく粉状に碎いて精査したが、別のやや小形の鉄斧の可能性のある鉄器の小残片が見つかった他は、玉類等の細かい遺物は全く認められなかった。

### (3) 出土遺物

#### 1) 二重口縁壺 (Fig.16, PL. 8~31)

Fig.16-1は墳頂部東縁の墳丘表面で検出されたものである。遺存率は約1/3程度の破片がある。口縁部と、頸部以下胴部上半は接合しないが図上復元し、底部の破片も図化して、図上で完形復元した。口径27.5cm、頸部径17.6cm、胴部最大径49.5cm(以上は復元径)、復元高約64cmを測る。底部は、全体的には丸底を呈するようだが、径6.2cm程度の円板が最下部にある。穿孔は無い。焼成は良好で、胴部中位に黒斑がある。色調は外面が浅橙灰~赤橙色、内面が黄橙~浅黃灰色を呈す。胎土は、やや粗いが精選した土に1mmまでの砂粒が少量入る。砂粒は石英・流紋岩?・長石および赤色粒子を含む。器面は荒れ気味で、調整は若干不明な部分もある。口縁部(二次口縁)はやや内傾気味に直立し、端部はわずかに外反する。端部外側は面を呈する部分があるが、多くはヨコナデでやや丸みを帯びる。外面はやや雑で断続的なヨコナデ、内面は上半オサエ整形後ヨコナデ(断続的)、下部は粗いハケメ後やや雑なヨコ

「古文化読叢」20(中))。木棺の全長は不明であるが墓壙からすると3.0m前後だろう。木棺の設置は、墓壙底部中央に横断面台形(棺を据える所は凹む)の棺台を土で構築し、これに棺身を置くものである(Fig.15-(3), PL.7~28参照。なおFig.14-(3左)の5・6層はこれである)。棺身と蓋との合わせや被覆には明確な粘土を使用していない。木棺の設置方式は、上記の吉留氏の論考のA2類である。また墓壙の底面は、頭側と推定される北端が65.2m、南端は64.9m(Fig.14参照)であり、約30cmほど推定足側(南側)が低い。また南側の墓壙の横断面は東側しか残らないが、底面が少し段状を呈する(Fig.15-(4))。

遺物は(Fig.14-(2), P

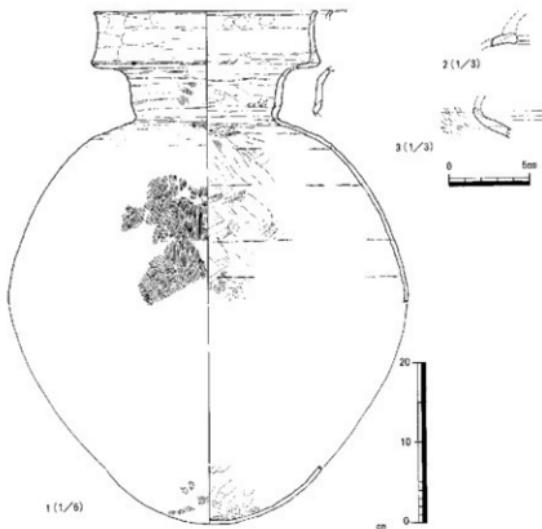


Fig.16. 墳頂部出土壺形土器(1/6, 1/3)

胴部の大部分は細かい条痕のハケメを施し、肩部はさらにナデを施すようである。胴部上半の器面の凹凸から、タタキ整形の可能性もあるが定かではない。胴部内面は摩滅し不明瞭だが、ケズリに近い板ナデで、その前に一部ハケメがある。整形時のオサエや、一部粘土帶の接合部が亀裂として看取される。底部付近は、外面はハケメ、内面は底部付近を押捺（オサエ）後、板ナデまたはナデを施す。

こうした直立する口縁部の二重口縁壺の類例はあまりないが、宗像市東郷高塚古墳の「壺形土器D」（宗像市教育委員会1989『東郷高塚I』）は、口縁部がやや外傾気味なもの、胴部を含めた全体的なプロポーションはよく似る。ただし頭部は中膨らみにならない。頭部が中膨らみのものは、福岡市西区野方久保遺跡第1次調査SC-39出土の壺形土器（03906）がある。ただしこれは胴部がやや長く、口縁部は外へ開く。前者は、他の壺形土器や埴形から「前方後円墳集成」編年の3期の新相から4期に位置し、後者は共伴する壺・高杯・小形丸底壺から布留式新相併行である。Fig.16-1の舞松原古墳の壺形土器は、胴部が薄く丁寧で、口縁部も同様で、鈍重な作りの野方久保例に比べて古い様相であり、東郷高塚の時期と併行すると考える。最近の重藤輝行の土器編年に照合すればそのⅢA期（野方久保例はⅢA期新相～ⅢB期か）にあたるであろう（重藤・西健一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性」『日本考古学』第2号）。

Fig.16-2・3は二重口縁壺の小片である。この古墳に伴う築造時期に近い土器は、以上の3点が確実で、今回の調査での他の出土土器は、ほとんどが奈良時代以降で、他に古墳時代の十師器は図示に堪えない細片がわずかにあるのみである。2は一次口縁部の端部だが、1に比べて外側の面取りがシャープであり、外面のヨコナデも同様である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。砂粒は石英ないし花崗岩を少し、および雲母を多く僅か含む。焼成は、断面の芯が暗灰色になる。色調は橙～明褐色を呈す。外面は赤彩の可能性がある。胎土・焼成は、管見では福岡平野（那珂川下流域）のものに類似する。3は頭部からその直下の小片である。外面は、頭部のくびれの部分にシャープなヨコナデ、内面はナデ、頭部への移行部分はケズリのようである。1と比べて頭部から頭部への移行がやや緩慢か。胎土はやや粗く、少量の石英（長石も含む？）・輝石（角閃石？）が含まれる。焼成は2に似るが、やや良好か。色調は橙～にぶい黄橙色を呈す。1と2・3は、あるいはタイプが異なる可能性もある。

ナデ、一次口縁外面はナデを施す。一次口縁の端部は擬口縁状になるが、二次口縁との間の外面には沈線状の凹みが走る。頭部は中位より下がやや外に膨らむ形状で、直立的だが若干外に開く。胴部との接合部は薄くなり、鋭角的な接合である。この点と頭部の形状は、口縁部が一見山陰系壺に似るが、その系統ではないことを示す。外面は、ナナメハケ後丁寧な横のナデ、内面はナナメ板ナデ後ナデ、下部にヨコナデ、一部粘土帶接合のオサエが残る。胴部は薄く丁寧に作られ、全体的にややなで肩、胴部最大径は中位にあり、つぶれた卵形を呈する。外面は、頭部から下、肩部上部まではヨコナデ、

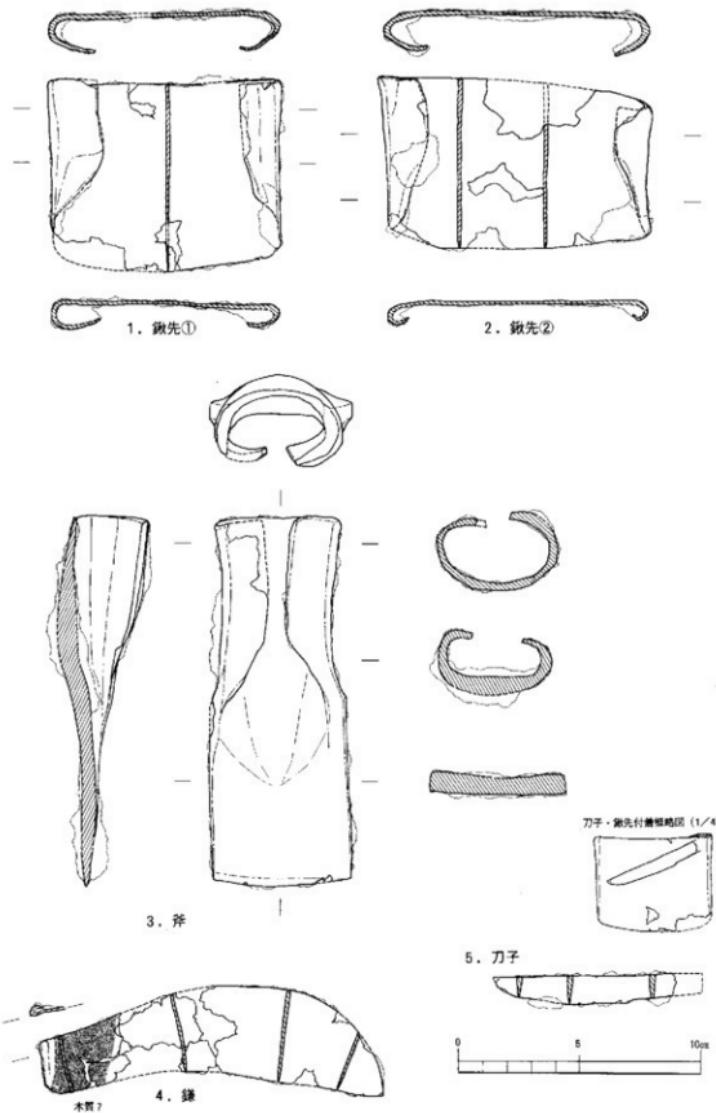


Fig.17. 主体部出土鉄器実測図(1/2)

## 2) 主体部出土鉄器 (Fig.17, PL. 7-24)

鉄先① (Fig.17-1) 最大幅9.6cm、長さ7.9cm、刃部幅は欠損するが推定9.3cmを測る。正方形に近い。刃先は若干曲線を呈する。刃ははっきりしないが両刃か。全体的に薄手である（厚くて2mm強）。長方形の鉄板の左右を折り曲げ耳部をつくるが、折り曲げは甘い印象を受ける。ここで「鉄」としたのはその機能を限定するものではなく「鋤」かもしれない。最近は「方形板刃先」という呼称が一般化しているものである。（例えば都出比呂志1989「農具鉄器化の諸段階」「日本農耕社会の成立過程」、など）。都出氏の分類では、やや小形の一派のBグループになる。耳部内側には木質痕は遺存しない。

鉄先② (Fig.17-2) 最大幅11.25cm、長さ7.1cm、刃部幅10.4cmを測る。部分的に欠損するが、これは錆による崩壊である。やや横長の長方形を基本とするが、基部右半分のラインは曲線を呈し、耳部右側が短くなり、このラインはやや湾曲する。一方、刃先は緩い曲線を呈するが、左側で急に曲線がきつくなる。あるいは、使用で欠損したもの再加工したものかもしれない。刃先は両刃らしい。厚さは鉄先①と同様薄手である。耳部は鉄板の左右を折り曲げてつくるのは鉄先①と同じだが、その下端は身へ鍛接させているように見られるがよく分からぬ。耳部の折り曲げは①と同様やや甘い。木質痕の遺存は見られない。これもサイズ的には上記のBグループに入る。

斧 (Fig.17-3) 錫造の有袋鉄斧で、全長15.2cm、最大幅5.75cm、刃部幅5.65cm、袋部長（ひらきの先までとした場合）約8.0cm、袋部最小幅4.5cmを測る。袋部右側のラインは錆のためやや不明確である。刃先は緩い曲線を呈し、両刃のようである。袋部の合わせ目は開いており、袋部折り返しの下端は鍛接されているように見えるが不明。また袋部の形状は断面楕円形を呈する。側縁のラインは、袋部の中位でややすぼまつて再び広がり、刃部との境界付近で軽い肩状になり、幅は殆ど変化せず直線的に刃先に至る。袋部内側に木質は遺存しない。刃部の厚さは6mm強、袋部の身の厚さは錆ぶくれで不明確だが9mm程度か。なおこれとは別に、小形の有袋鉄斧の袋部の可能性ある細片が1点出土している。

鎌 (Fig.17-4) 一根などの搅乱で欠損が多い。全長14.1cm、刃部長約12.0cm、刃部最大幅3.75cm、基部幅2.3cm、（先端はややすぼまつり1.7cm）、厚さは1.5~2.0mm、基部の折り返しは約7.0mmをそれぞれ測る。基部折り返しから推定される着装角度は約105°である。形態的には、欠損多く接合も一部不明確な部分もあるので図とは多少異なる可能性もあるが、刃部が直線的と言うよりは全体としてゆるく湾曲するのは間違いない。広義の曲刃鎌になるが、先端付近を折り曲げる古墳時代中期中葉以降のタイプの系譜とは異なり、むしろ直刃鎌に近いものである。半月状の鉄板を加工したものである。寺沢薰の分類案を参照すると、曲刃鎌BでⅡ類（中形鎌）となる（寺沢薰1991「収穫と貯蔵」「古墳時代の研究」4）。なお図のアミかけの部分は錆の質や色が他の部分と異なり、これを木質の痕跡とすれば、着柄状態で副葬された可能性も出てくる。これは出土状況とも矛盾はしない。

刀子 (Fig.17-5) 基の一部と刃の先端わずかを失す。残存長7.4cm、刃部残存長5.4cm（推定5.6cm）、刃部幅1.2cm、茎1.0cmを測る。推定全長8.5cm程度か。直背で（2mm強）、刃部には闇をつくる。闇は刃に対して斜行する。茎に木質などの遺存はない。茎は刃部側に若干細くなる。鉄先①の裏面に錆着して出土したが、(Fig.17-5上図参照)。現場では気がつかず、錆落し中に判明したものである。

以上、主体部出土の鉄器について説明したが、これらは形式的に古墳前期から中期前葉（前方後円墳集成の5期まで）のセットとして類例もあり、壺形土器で推測した古墳の時期と矛盾しない。鉄鎌も、このタイプは九州では少なくないものである。ただし棺内のある箇所に、比較的少量の農工具のみのセットを副葬するあり方は、前期末から中期前葉に多いことは古墳の製造時期を限定する材料になる。

## 4 歴史時代の遺構と遺物

### (1) 第5トレンチ土壤墓 (Fig.19, PL. 8-33) と出土遺物 (Fig.18・20)

土壤墓は第5トレンチを南側に拡張中に検出された。はじめ土壤墓の存在に気づかず、くびれ部と確認した部分を掘り下げ中に越州窯青磁碗の縁を引っかけ、急速平面的にプランを検出した。このような

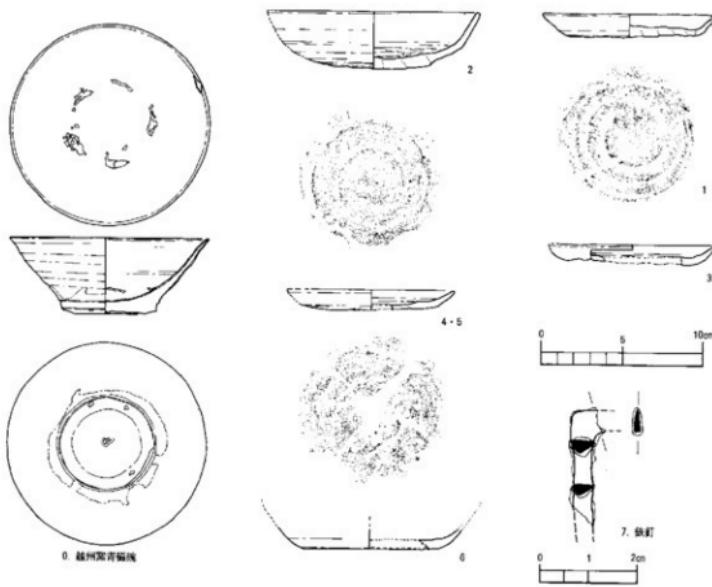


Fig.18. 第5トレンチ土壤墓出土遺物実測図(1/3, 1/1)

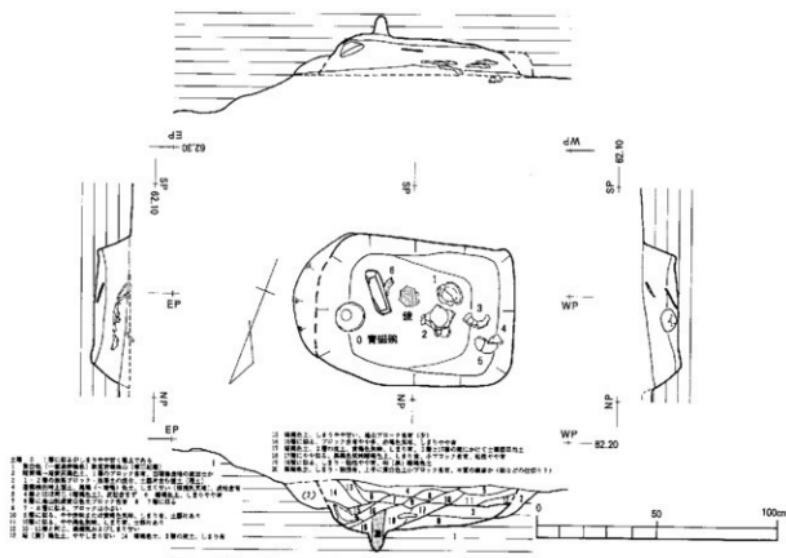


Fig.19. 第5トレンチ土壙墓平面図・断面図・土層図(1/20)

圖 18 生殖圖 (1) 20  
半漁物骨盆 Fig. 18-1 雌的

状況なので、若干の掘り過ぎがある。東半分は地山を、西半分は古墳築造後の流土（周溝状の部分への覆土）を掘り込んでいる。平面形は東西約81cm、南北約60cmの略長方形である。西側がやや浅く、東側で検出面から24cmの深さを測るが、一部軸において直交する溝状の掘り込みがあり、これは土層観察の結果木質の痕跡らしき黒色粘質土が入り（20層）、板などの仕切りないし小口板の痕跡と見られる。図面では表し難いが、北辺と南辺にも側板があったような浅い溝があるようにも思われる（Fig.19の横断面参照）。一本の釘状の鉄製品を検出しておらず（Fig.18-7）、木棺または木櫃状の施設が考えられる（掘削土を全てふるいにかけたが、釘は1本しか検出できなかった）。遺物の出土状況は、西側上層に土師器類があり、中心付近の下層に八稜鏡があった。前者は棺上にあったものが落ち込んだもの、後者は棺内ではあるが、原位置からは移動したものであろう。青磁碗は小口板の外側にあり、棺外に埋納されたものがやや傾いたか。いずれにしても副葬品の内容は優秀で、被葬者の階層を示唆する。

Fig.18-0の越州窯青磁碗は、口径12.4cm、高さ4.7cmを測る。オリーブ色というよりは浅黄色を呈する。内面は全面、外面は体部下半の途中まで施釉、目跡は内面見込みに5箇所、底部外周に小さく3箇所付着する。底部は削り出しの低い輪高台であるが、多数派の形式ではない。形式的に9世紀後半～10世紀初頭のものという（田中克子氏御教示）。Fig.18-2～6の上部器坏・皿は、いずれも底部ヘラ切

りだが、成形時に粘土糰を巻いた痕跡が残るやや雑な作りである。2は丸底坏の系譜のもので、6は坏a類、1・3・4(5)は小皿a類の出現期のものか。山本信夫の編年（山本1990「統計上の土器」「九州上代文化論集」）のX期またはその直前頃（10世紀後半～末）であろうか。Fig.20は瑞花双鳳八稜鏡である。径9.1cmを測る。布の付着が一部にある。ごく僅かに反りがある。外縁の稜は八つに正分割されていない。稜が甘く縁が低い部分があり、湯口方向を示し、湯冷えが鉢の周囲からこの稜の左右へ広がるのが看取される。全体として紋様は極めて不鮮明であり、湯冷えだけではなく、浮き彫りの柄が流れシャープではないことなどから踏返しと断定できる。縁の断面は三角形で、外区文様は本来の唐草紋から離れ意匠化した点紋となり、稜が等分ではないので区画ごとに異なる文様配置となる。圓線（小突線）は鋲出不明瞭である。内区は一対の鳳凰と、この間に唐草紋が退化した瑞花紋に入る。鉢座は珠文が列点をなすが正円をなさない。さらには鉢が中心から外れる。以上のようにこの鏡は、

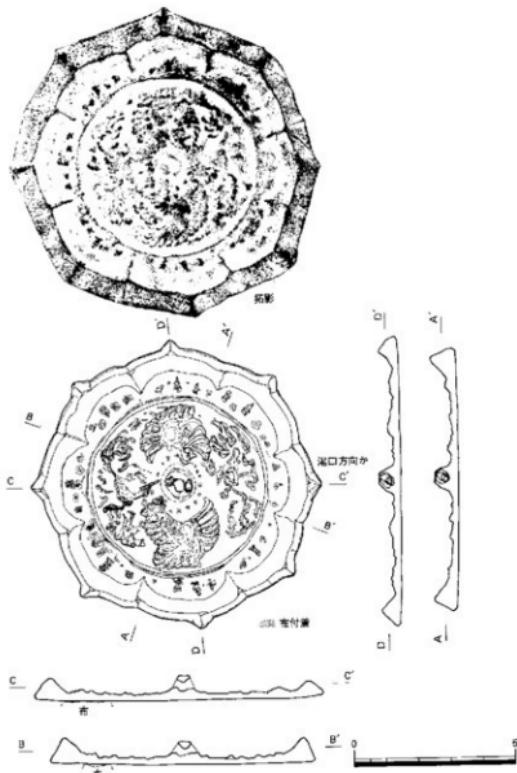


Fig.20. 第5トレンチ土壙墓出土瑞花双鳳八稜鏡(2/3)

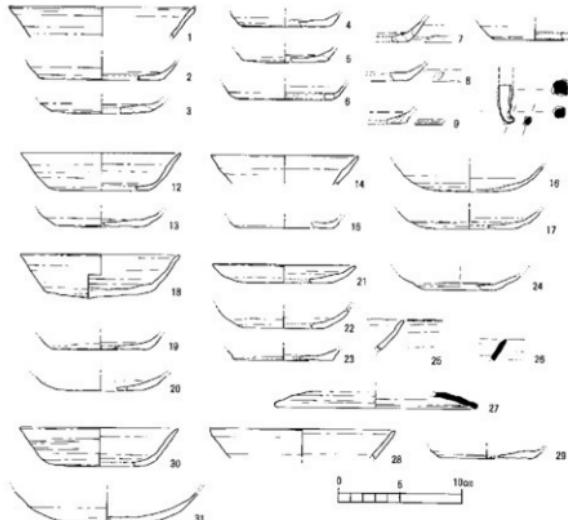


Fig.21. 墳丘各所出土遺物(1/4、鉄釘は3/4)

## (2) 墓丘各所の遺物 (Fig. 21)

墳丘表面と各トレンチからは歴史時代の土師器・須恵器が検出されている。実測可能な遺物は極力図示した。このうち第1トレンチ出土のいくつかのものは、釘の出土から本来土壙墓に伴うものであろう。第5トレンチの上塙墓の検出を勘案すれば、墳裾には一定数の上塙墓の存在が考えられる。墳頂部SX01の最下層でも土師器片が出土するが、SX01の年代を示すかとなると疑問である。これらの遺物の上限は奈良時代で、下限は糸切り底の可能性のある土師器が1点のみあるので、8~12世紀頃にかけて墓所や祭祀の場所として利用されたらしい。これらの遺物の詳細は以下の観察表によられたい。

· 表 1 遺物

文様は退化したもので、いい加減な割付けで鏡型が作られ、それから起こした原鏡を踏み返し（その技術も稚拙）、鑄造も著しい湯冷えを起こしている。こうした粗悪な鏡は平安後期以降に一般的である。型式的には、杉山洋の分類のV（またはVI）式にあたり、10世紀末以降のものとされる（杉山1991「今様の鏡」と「古跡の鏡」『MUSEUM』481 東京国立博物館）。以上のように、土墳墓出土遺物は土師器と鏡からは10世紀末前後という年代が得られ、越州窯青磁碗のみ伝世した可能性が高い。

### III まとめ

調査結果をもとに、墳丘の復元図を示した(Fig.22・23)。下端での全長は37.4m、後円部径は29.7m、造出部は、長さ約10m、前端幅推定11m、くびれ部幅7.8mとなる。ところが、築造企画の復元では、当時の面を考慮する必要がある。基壇は地山削り出しであり、この上端が設計線となる。造出部は全体的に削平を受けているので、これを復元すると、本来の上端ラインは8トレンチの中間付近になる。造出部はFig.22のアミかけ部分よりも小さくなる。以上のおもとに、基壇上端での規模を復元すれば、後円部径27.3m、造出部の長さ6.8m前後、前端幅7.0m前後となる。この後円部直径を八等分した長さが約3.4mとなり、造出部長はこのほぼ二倍になる。すなわち「二区型」の帆立貝式古墳という企画が復元され、前方後円墳というよりは造出付円墳になることが判明する(石部・田中・宮川・堀田1980「帆立貝式古墳の築造企画」『考古学研究』27-2、遊佐和敏1980「いわゆる「帆立貝式古墳」の形態的分類について」『古代』68)。さらに中段テラスの外側は、墳丘の中心(Fig.22のO)から約10.3mであり、「三区」分にはほぼ等しい。このテラスの内側から盛土が施される。なお墳頂平坦面は径9.6m前後か。

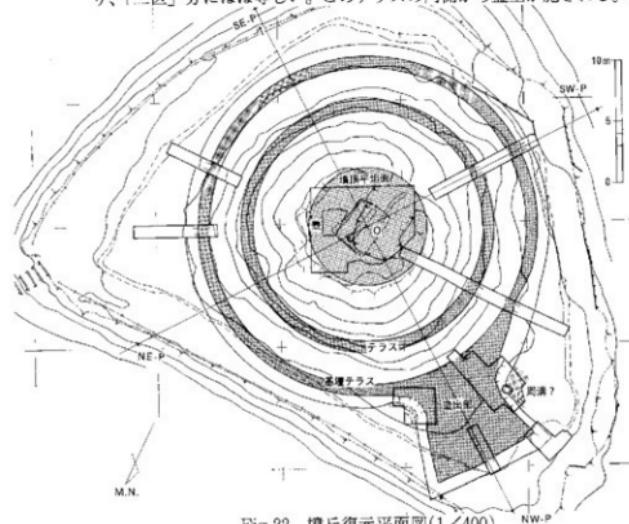


Fig.22. 墳丘復元平面図(1/400)

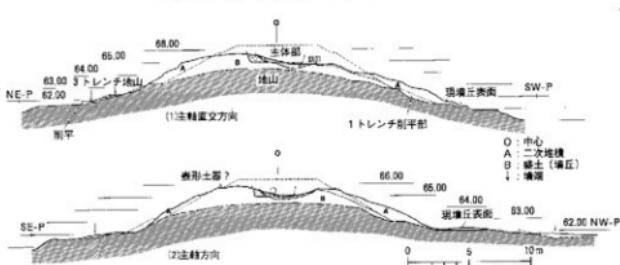


Fig.23. 墳丘復元断面図(1/400)

古墳の時期は、壺形土器と鉄器から、「前方後円墳集成」の編年では3期末から4期、曆年代では4世紀末頃になる。造出付円墳としては九州で最も古く、全国的にもまだ少ない時期で注目される。この時期は畿内の大王墓に造出部が登場する時期で(津堂城山古墳など)、造出付円墳の成立と波及も連関性が深い。舞松原古墳の墓壇の底面は足側に傾き、非北部九州的(畿内的?)で、頭位が真北に近いものも同様で、さらに壺形土器から東郷高塚古墳のある宗像との関係性が示唆されるならば、その頃始まった沖ノ島祭祀を通じた宗像と畿内王權の特殊な関係も、古墳築造と無関係ではないだろう。大破しながらも残った副葬品の内容から言えば、本来の豊富さが予想され、規模と形状から、この地域の首長墓の一つになるのは間違いない。

# 図 版



1. 南西（松崎緑地付近）から舞松原丘陵を望む  
(↓は古墳の位置)



2. 北東（城ノ越城山頂）から舞松原丘陵を望む



3. 調査前の墳丘の状況（東から）



4. 調査開始直後の墳丘北西部（造出付設部）の状況（北西から）



5. 調査前の墳丘南西部の状況（第1トレンチ掘削前）（南西から）



6. 第1トレンチ掘削状況（および南壁土層下半の状況）（左下から）



7. 第1トレンチ上部南壁土層（盛土）の状況



8. 第1トレンチ中部南壁土層の状況



9. 第2トレンチ掘削状況（下から）



10. 第2トレンチ掘削状況近景（下から）



11. 第2トレンチ上部南壁土層（盛土）の状況



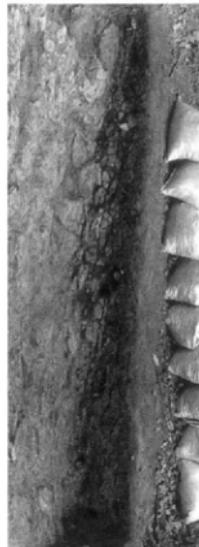
12. 第3トレンチ掘削状況（東から）



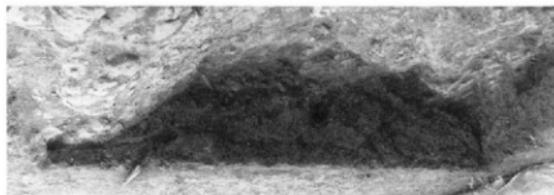
13. 第4トレンチ掘削状況（南東から）



14. 第5トレンチ（くびれ部）掘削状況（北西から）



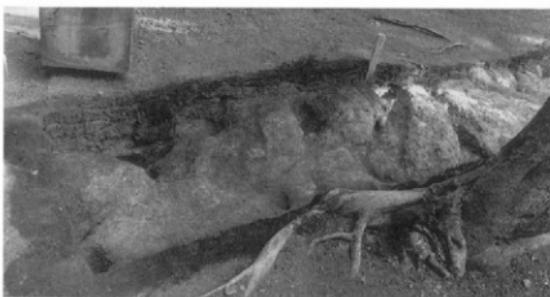
15. 第5トレンチ南西壁  
土層状況（右が天）



16. 第5トレンチ北西壁  
土層状況（下が天）



17. 第6トレンチ掘削状況  
(北西から)



18. 第7トレンチ掘削状況  
・東壁土層状況（填埋付近）



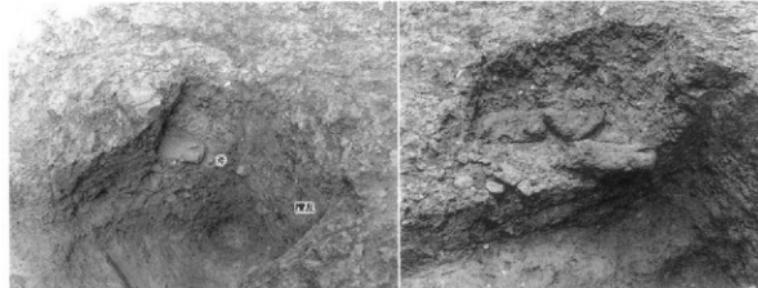
19. 第8トレンチ掘削状況  
(後方は第5トレンチ北西から)



20. 第5・6・7・8トレーン  
造出部確認状況（墳頂から）

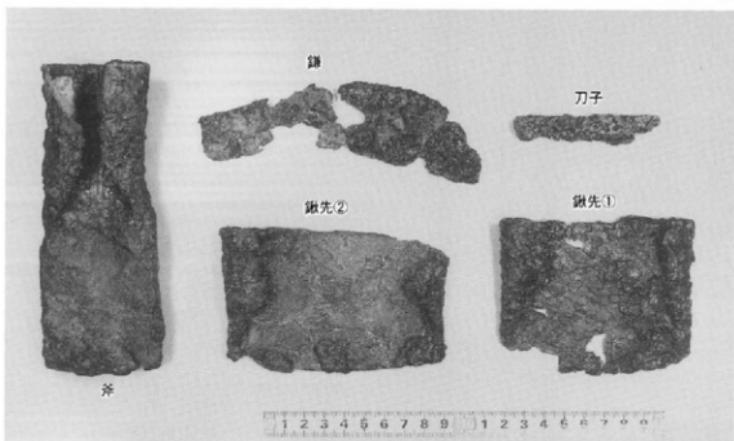


21. 主体部鉄器出土状況近景  
(上から)

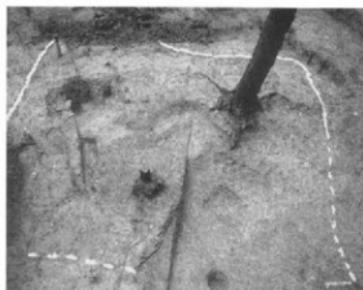


22. 主体部鉄斧確認状況（南から）

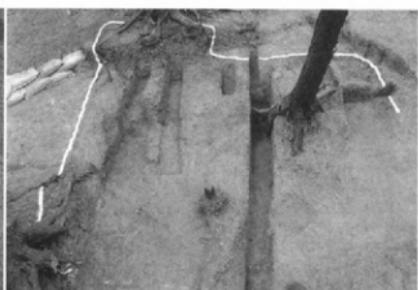
23. 主体部鉄器出土状況（南から）



24. 主体部出土鉄器



25. 主体部全景（墓壙は未掘削、西から）



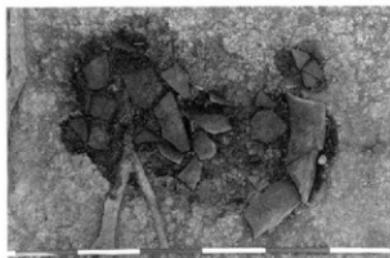
27. 主体部墓壙全景（墓壙の一部をトレーナー削削、西から）



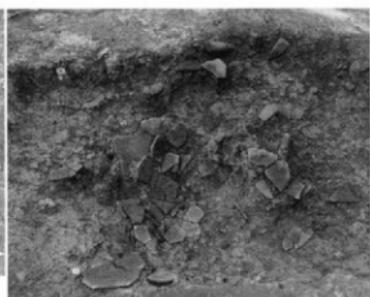
26. 主体部全景（上に同じ、南から）



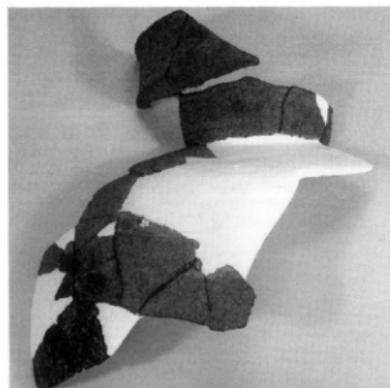
28. 主体部横断截割状況（南から、後方は埋め戻し途中）



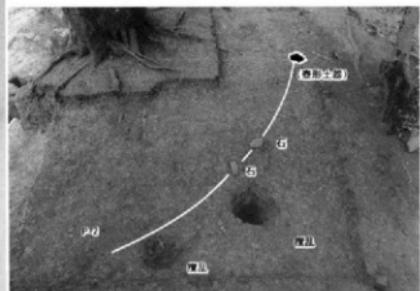
29. 墳頂部二重口縁壺出土状況（上面、北から）



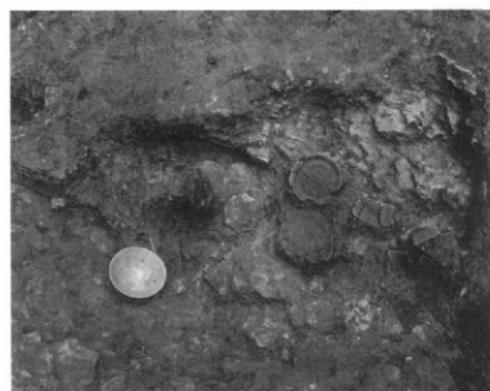
30. 二重口縁壺出土状況（下層、西から）



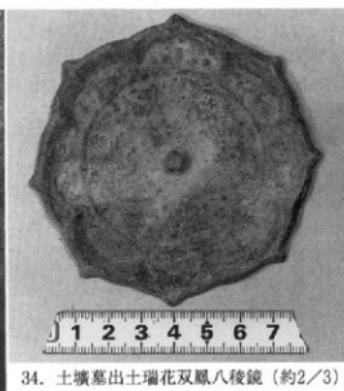
31. 墳頂部出土二重口縁壺



32. 墳頂部調査区東南部掘削状況



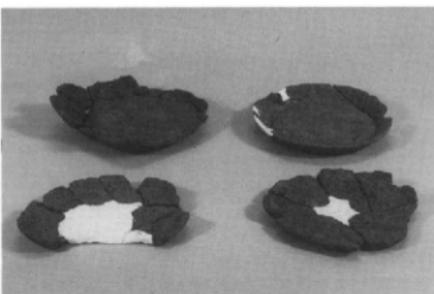
33. 第5トレンチ土壙墓遺物出土状況（北から）



34. 土壙墓出土瑞花双鳳八棱鏡（約2／3）



35. 土壙墓出土越州窯青磁碗



36. 土壙墓出土土器器坏・皿



37. 調査後設置された説明板

